『まんじ』四十周年記念に
バックナンバー87冊を電子書籍化しました

新井　宏

去る五月二十二日に予定されていた『まんじ』百六十号記念の合評会は、予定通りと言うべきでしょうか、コロナ禍のために中止されました。合評会の後には「百六十号記念」の祝賀会もあったでしょうから残念でした。

お気づきの方もおられたでしょうが、実は『まんじ』創刊号が発行されたのは、昭和五十六年三月のことです。ちょうど四十年前で、創立以来の同人三戸岡道夫氏は「天明七年」と題した小稿を載せておられました。

それにしても、季刊(年四回)の発行で百六十号、計算すればピタリ四十年です。立派なものですね。

同人が数多く参加する祝賀会などは無理としても、せめて個人的に何か出来ることはないだろうか。

そこで思い立ったのが、四十周年記念として『まんじ』全バックナンバーを電子書籍化してみたいという個人的な構想です。

幸い手元に『まんじ』七四号から一六〇号まで八十七冊があります。重量で言えば、二十三キログラム、厚さは約一メートルになります。もはや読み返すこともあるまいと思いながら、とにかく私の人生の大切な「記録」として保管してきました。

ご承知のように、十年程まえから、貴重な蔵書を「自炊」と称してコピーして電子書物化するのが流行しています。「自炊」とは、自分の書籍や雑誌をスキャナ等でコピーし電子画像に変換する行為を指す俗語だそうですが、コピーに際して、書物の背を裁断して両面スキャナで自動的に読み取る方式が主流でしたので、私はてっきり「自裁」のことだと思っていましたが異なるようです。今では専用のスキャナも開発され、専門業者が、一冊当たり四百円から五百円で「自炊」してくれるそうです。

試みに手持ち八十七冊を「自炊」してもらうと運送費等を含めて五万円、それにソフト代を加えると十万円というところでしょうか。

ただし、本を切断してしまうのが、感覚的にひっかかりました。またかつて『まんじ』連載物を単行本にまとめた方のお手伝いとして、普通のスキャナでパソコンに取り込んだ経験があります。スキャナによるコピー作業は、サッカーや野球、あるいは駅伝やマラソンなどのテレビを見ながらできるのであまり苦になりませんでした。

そうだ。手数はかかるが、とりあえず十五年分(一〇〇号から一六〇号)について自分の思いとおりの電子書籍を作ってみよう。全作品を載せるのはもちろんのこと、基本的には検索機能をつけて、人名や地名、出来事などで作品を探せるようにし、更には、目次集、編集後記集、同人個人著作集、長編連載の集成、などが簡単に作成できるようにしてみたい。またパソコンやスマホに馴染みのない方のために、家庭用のテレビでも簡単に全作品が読めるようにしてみたい。

四月末から作業をボチボチ始めていましたが、六月六日までに十五年分の入力作業を終えて、原稿提出日までには、手持ちの全バックナンバーの処理が終わる見込みです。「ただ働き」でご苦労なことと思われるかも知れませんが、私がしばしば言うように「ただ遊び」なのです。何かが少しずつ積み重なり出来上がってゆく過程は「快感」です。昔は日常生活に満ちていたこの感覚が今では努力しないと得られません。

さて、前にも簡単に紹介したことがありますが、私達の『まんじ』は、現存同人誌の中で、最大規模の発行号数(現在一六〇号)と最大規模の年間刊行頁数(九〇〇ページ)を記録しています。

もっとも「同人誌」とは「特定の同人が資金を出し合い、自らの作品の発表の場とする逐次刊行物」の意味ですので、『三田文学』や『早稲田文学』など、あるいは大手出版社系の『文学界』、『新潮』、『群像』、『すばる』などは、当然除外しています。『県名+文学』を名乗る「同人誌」も、地方自治体のサポートを受けている場合があり、特定の同人ともいえないので一応精査して除外しています。

更には当初「手弁当」で始めた「同人誌」でも有名に成り「文学賞登竜門」などとして投稿者を募り営業誌化している場合も対象外と考えました。すなわち単純に言えば、『まんじ』のように財政的に同人と維持会員によって支えられている場合のみを「同人誌」として調べてみたということです。

原則として百号以上の「同人誌」をリストアップしましたが、俳句、短歌、詩歌系統の同人誌は百号を超える場合も珍しくないので除きました。その一方で、営業誌

化していると言っても単純に除外するのでなく一応リストには含めました。例えば、一九五八年鹿児島のハンセン病棟の患者とスタッフ二十六名によって創刊され、現在二百号を迎えている『火山地帯』はそのような例になります。

100号以上継続の「同人誌」の総合順位

同人誌名	創刊	最新号	費用負担形態	年刊行回数	最近の頁数	同人誌規模(号×頁)	総合順位
まんじ	1981年	160号	同人負担	4回	250頁	40,000	1位
人間像	**1954年**	**190号**	**商業誌化**	**1回**	**180頁**	**34,200**	**2位**
海峡派	1977年	151号	同人負担	3回	200頁	30,200	3位
姫路文学	1948年	134号	同人負担	1回	200頁	26,800	4位
火山地帯	**1958年**	**201号**	**商業誌化**	**3回**	**100頁**	**20,100**	**5位**
竜舌蘭	**1938年**	**200号**	**商業誌化**	**2回**	**100頁**	**20,000**	**6位**
じゅん文学	1994年	105号	同人負担	4回	180頁	18,900	7位
文宴	1963年	135号	同人負担	2回	120頁	16,200	8位
小説家	1965年	147号	同人負担	3回	110頁	16,170	9位
播火	1989年	107号	同人負担	1回	150頁	16,050	10位
Ten	1992年	124号	同人負担	3回	120頁	14,880	11位
岡山文芸	1958年	124号	同人負担	2回	120頁	14,800	12位
裳	1979年	144号	同人負担	3回	100頁	14,400	13位
砂	1977年	142号	同人負担	2回	100頁	14,200	14位
婦人文芸	1956年	100号	同人負担	1回	140頁	14,000	15位
全作家	1976年	119号	同人負担	3回	110頁	13,090	16位
文芸中部	1982年	116号	同人負担	3回	110頁	12,760	17位
たまゆら		122号	同人負担	4回	100頁	12,200	18位
新現実	1948年	146号	同人負担	4回	80頁	11,680	19位
美濃文学	1968年	100号	同人負担	2回	110頁	11,000	20位

「同人誌」の規模を評価する基準としては「継続号数」が適当ですが、号当たりの「頁数」も無視できません。そこでむりやり「継続号数」と「最近の頁数」を掛け合わせた数値を総合順位の規準としました。

その結果では、商業誌化した「同人誌」を含めても『まんじ』が断トツです。

一般的に「同人誌」は「意気込んで創刊しても三号で終わる」事例が多く、最新号が五〇号以上なら立派なものだと言われています。

しかし「同人誌時評」欄で継続的に「同人誌」の作品を紹介している『図書新聞』も、文芸同人誌の紹介を目的として二二七誌を収録しているサイト『文芸同人誌案内』も、『まんじ』のことを当然記載していません。そんな事情もあって、やや力んでしまいました。

スキャナ作業をしながら、『まんじ』の特徴は何だろうかと想いました。印象に過ぎないのですが、かつては、俳句、短歌、漢詩などの作品が充実していましたが、最近はかなり減少しています。女性の同人も大きく減少しました。それに対して、論評、論文、そして特に長編の

「評伝」関係が非常に充実してきています。

ちょっとメモって見ましょう。

三戸岡道夫氏(金原明善、米山梅吉、石川理紀之助)、松下魏三氏(赤堀四郎)、太田精一氏(大草高重、天羽英二)、山田嘉久氏(司馬遼太郎)、鍋屋次郎氏(高山右近)、山本鎭男氏(新明正道)、山本勉氏(渋江保)、村上邦治氏(千家尊福、大谷光瑞)、安藤剛氏(伊達政宗)、そして新井宏(狩谷棭齊)、と続く豪華さです。最近では、その過半が単行本として出版される勢いです。

その他にも、永田俊一氏の「信託の歴史」のように専門家の記述として圧倒的な水準のものや、曽根竣作氏の歌壇史、忠内正之氏の茶道史、鈴木守氏の化粧史などもぜひ史料として残したい著作です。

そんな『まんじ』の変遷を文芸誌から総合誌に脱皮したと表現した方もいます。だからこそ『まんじ』を他の「同人誌」に先駆けて電子書籍化し、検索機能付きで公開したいというのが、私の漠然としたイメージでしたが、やっと形になりました。数えてみますと、四十年間の延べ同人数は八十名(内女性十二名)、掲載が百回を超えた方が三名おられます。

重さ二十三キログラム、厚さ一メートルの八十七冊は電子書籍ではどうなったでしょうか。もちろん核心の「情報」に重さがあるわけではなく、その容れ物(記憶媒体)のことです。

良くご存知の方には目障りでしょうが、ここから少しパソコンのことを紹介します。

「電子情報」は PDF という形式で保存されます。ワードとかエクセルとかと同じレベルのソフトです。私は最初 PDF を Print Default File すなわち印刷規定ファイルのことだと思っていました。ワードやエクセルではパソコン側のソフトによって印刷に微妙な差が生じますので、それを防ぐために規格を作ったのだと思っていたのです。しかし実際は Portable Document Format の略で、アプリや OS、ハードウェアに依存せず文章や図版を表示するために開発され電子文書ファイル形式のことだそうです。意味はそれほど間違っていませんでした。

この PDF 形式はアドビ社が開発したものですが、それを普及させるため、PDF を読むソフト(Adobe Acrobat Reader DC)を無料で公開しました。だから誰でも PDF を読めたわけです。ところが PDF が流行するようになると改良ソフトが次々に付加されて開発されます。それに対してアドビ社は無料のソフトでは新機能を含む PDF の一部を読めないようにしたのです。純正部品でないと何かと意地悪されるようなものです。そのため、無料のアドビのソフトでは読めない PDF が存在します。

今回の『まんじ』電子書籍はいずれインターネット上にも公開したいと考えています。インターネットを利用するには Web Browser(ウェブ閲覧ソフト)が必要ですが、最も多く利用されているが Google Chrome で、次に多いのが Microsoft Edge です。これらの閲覧ソフトを利用している限り問題はないのですが、未だ Internet Explorer を利用している方もいます。その場合には PDF の Reader としてアドビ社の Adobe Acrobat Reader DC を使っていますので、問題を起こす可能性があります。本稿の末尾にその対処法を示しておきますので、お読み下さい。

なお、PDF にはテキスト付き PDF とか OCR 付き PDF とか称する検索機能付きのものがあります。単に文章を読むだけなら不要な機能ですが、学術的な論考の場合にはとても有効な機能です。

それからテレビでも見ることができるようにすると言いましたが、今のところテレビ側では PDF に対応していません。しかし有り難いことに、数千枚の写真を USB メモリーに入れて鮮明な映像を楽しむことは今ではかなり普及しています。写真の映像を JPEG 形式といいますが、今度の電子書籍でも、全頁、JPEG 方式でも作成していますので、ご利用下さい。リモコン操作だけで簡単に映写する方法は、ご家族でどなたかご存知です。

さて、長々と PDF や JPEG のことなどを書きましたが、電子書籍をどんな形式にしておくのが良いか、私なりに迷っていましたので、ちょっと書いて見たかったのです。

それでは本題に戻ります。

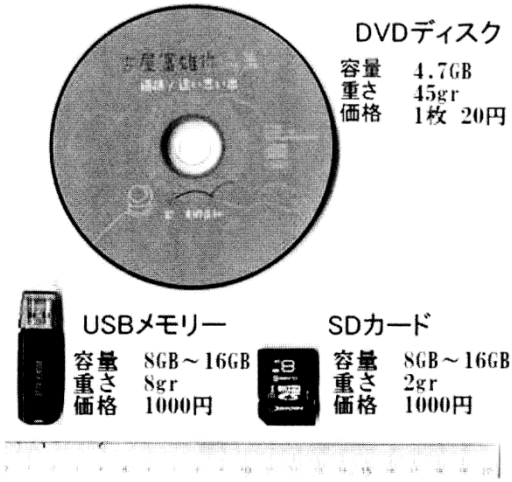
まず電子書籍化した『まんじ』の記憶媒体としては 4.7GB 容量の DVD ディスク、8GB～16GB 容量の USB メモリー、そして同じく 8GB～16GB 容量の SD カードなどが候補となります。

次の図をご覧ください。一番軽いのが SD カードで二グラムほど、紙に較べると一万分の一です。GB というのはギガバイトと読む情報の量ですが、1 GB で『まんじ』十五冊ほどの分量です。本当は USB メモリーでも SD カードでも 8GB あれば十分なのですが、8GB～16GB と書いたのは、現在、8GB と 16GB の価格差がほとんど無くなっているからです。共に一個千円ほどです。

それに対して DVD ディスクはケースにいれて五〇グラムほどですが、一枚二十円ほどで、4.7GB の容量があり、単に電子書籍を読むだけなら何とか全頁入れることができます。ダビングの業者に依頼して、百枚ほど複製して貰っても五千円程度(一枚五十円程度)で済み非常に安価ですので大量に配布する用途には好適です。

しかし最近のパソコンには DVD 読取り装置が付いていない場合が増えてきて、将来的には消えてしまう危険

性もあります。応急的には二～三千円程度の DVD 外部読取り装置を付ければ対応出来ます。



しかし、電子書籍を直接 DVD ディスクから読むのは一般的ではありません。普通はいったん DVD ディスクの内容をパソコン内に取り込んでしまうか、USB メモリーや SD カードにコピーしてから利用します。一回変換すれば済むので DVD 読取り装置の付いたパソコンをお持ちの方に変換を依頼するのが良いでしょう。

このように電子書籍を読むには記憶媒体が必要ですが、実はパソコンやスマホで既にインターネットを利用している方は、私のホームページに併設した「私設まんじホームページ」に直接アクセクして利用することができます。「私設まんじホームページ」にアクセスするにはウェブ検索欄に http://arai-hist.jp/ と入れると「新井宏(ARAI Hiroshi)の WWW サイト」が立ちあがりますのでそれをクリックして下さい。検索欄に「新井宏　まんじ」とでも入れても同じ結果がでます。

新井宏のホームページが出ましたら、①リンク欄の「まんじ」をクリックすると、②私設の「まんじホームページ」が立ちあがり、③下の方にある「目次」を見て「101～110 号」「121～130 号」などを選ぶとその内容を見ることが出来ます。その際に、一緒にダウンロードすることも出来ます。

いったんファイルをダウンロードすれば、次からのアクセスは不要になります。ダウンロードの仕方はウェブサイトによって若干の違いがありますが簡単です。『まんじ』一号分をダウンロードするだけなら数秒で済みますが、全部をまとめると数分かかるでしょう。

実はインターネットからパソコンにダウンロードして利用して頂くのが理想的なのですが、同人以外の不特定な方もダウンロードできると、著作権侵害や人権侵害を

起こす危険性もあります。用心のため、当面は同人と維持会員以外のダウンロードを禁止すると注意書きをしておきますが、正式には『まんじ』合評会で審議していただいてから稼働させるつもりです。

さて、それでは電子書籍をどのように利用したらよいでしょうか。もちろん検索したり読んだりする基本機能は当然として、ちょっと思いついた利用法を上げてみましょう。

一、『まんじ』の活字が小さく、印字が薄いので、読むのに苦労されていませんか。そのような時には、最新号発行と同時に、電子書籍化して載せますので、ダウンロードしてパソコンやテレビに大きく写して見て下さい。楽になります。

二、電子書籍は安価なDVDディスクに入れて、気軽に旧友や親族、子々孫々に「記念品」として差し上げるのに適しています。その際には、著者の作品の集成版を付けると良いでしょう。消息を伝えるきっかけとなります。

三、注目すべき評伝、評論、論文などは関係者の目に触れるようにしたいものです。私の印象では実に精緻に調べ上げた作品が多く、このまま散逸させてしまうのはもったいないと思っています。やはりインターネット上に公開するのが良いのだと思います。その際には検索機能付きでないと役に立ちません。

四、最大規模を誇りながら、知名度の低い『まんじ』を一般に紹介するため、『図書新聞』の「同人誌時評」欄や、『文芸同人誌案内』サイトに、電子書籍化したDVDディスクに、本稿等を付けて送ってみたらどうでしょうか。

私の経験ですが、ある方から作品を載せた年刊の「同人誌」を頂いたので、その返礼に季刊四冊の『まんじ』をお送りしたところ、とにかくびっくりされました。

それにしても八月の合評会が開催されるといいですね。

稿末の注

インターネット上でPDFが正しく開けないのはそのReadingソフトにアドビ社のAdobe Acrobat Reader DCが使われているからだと述べました。それを回避するには、101-110号、111-120号などを直接左クリックするのを止めて、右クリックをして、「対象ファイルを保存する」という項目を選んでください。ダウンロードが始まります。そしていったん自分のパソコンにダウンロードしたファイルを再び右クリックして「プログラムから開く」を選ぶと、Google ChromeとかMicrosoft Edgeが現れます。それらを使えばPDFが正しく開きます。